

詩編 86 : 1～17

ルカによる福音書 11 : 1～13

「祈り」

<祈りを教えてください>

1 節には「イエスはある所で祈っておられた。」とあります。

イエスさまは、よく祈られるお方です。ルカによる福音書でこれまで読んできた中でも、イエスさまが祈っておられる場面が何度も語られていました。イエスさまと共に過ごしていた弟子たちは、いつもその祈られる姿を、間近に何度も見て来ました。

そんな弟子の一人が、祈りを終えられたイエスさまに言いました。

「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください。」

ある弟子が、弟子たちを代表して、イエスさまに祈りを教えて欲しいと願ったのです。

しかし弟子たちは、「祈る」ということを知らなかったわけではありません。彼らはユダヤ人ですが、ユダヤ人は、一日に何度も、よく祈ります。旧約聖書にも、彼らの先祖たちの祈りの言葉が、たくさん記されています。

でも弟子たちは、「イエスさまの祈り」を教えてもらいたいと思ったのです。

今日のところでは「ヨハネが弟子たちに教えたように」と言っています。このヨハネは、洗礼者ヨハネのことです。ヨハネとその弟子たちは、とても厳しい断食と祈りの生活をしていました。その中で、おそらくヨハネが弟子たちに教えた独自の祈禱文、決められた祈りの言葉があったようです。だから、イエスさまの弟子であるわたしたちにも、イエスさまの弟子として祈る、イエスさまの祈りを教えて欲しい、と願ったのです。

またそう願ったのは、イエスさまがいつも祈っておられる祈りが、これまでに聞いたこともないような、独特な祈りだったからです。他の人々とは何かが違う、イエスさまの特別な祈り。この祈りを、自分たちも祈りたいと思ったのです。

<イエスさまの祈り>

さて、イエスさまの祈りは、他の祈りと何がどう違ったのでしょうか。

イエスさまは、祈るときには、いつも神さまに「父よ」と呼びかけられました。最近読んだところでは、10 章 21 節で、イエスさまが「天地の主である父よ」と呼びかけて祈っておられます。また、マルコによる福音書では、イエスさまが「アッバ、父よ」と呼びかけておられたことが記されています。「アッバ」とは、当時のイエスさまが使っておられたアラム語で、幼い子どもがお父さんを親しく呼ぶ時の言い方です。アッバ、パパ、お父ちゃん。

イエスさまは、幼子が父親に信頼して、自分の身を任せて、親しく呼びかけるような、そ

のような言葉で、神さまと対話をしておられたのです。

祈り、というのは、神さまの御前に立って、神さまに語りかけることです。神さまとの人格的な関係、神さまとわたし、という関係があるということです。祈るとき、わたしたちは神さまに話しかけ、対話します。祈りと言うのは、ただ一方通行でこちらの願い事や希望を訴えることではありません。祈るとき、その目の前には、わたしの言葉を聞いて下さる神さまがおられ、祈りへの招きがあります。そこで、わたしたちは神さまのみ言葉を聞き、そして心の思いを注ぎ出すのです。

祈りは、神さまとの交わりの時、交流の時間です。ですから、この祈りをどう祈っているか、その祈りの姿が、神さまとその人との関係を映し出します。

地上を歩まれた神の御子イエスさまは、いつも祈って、生きておられる天の父なる神さまとの交わりの中で歩んでおられました。いつも祈りを通して、神さまの御心を問い、ご計画に従って歩んで来られました。「アッパ、父よ」と、深い信頼と愛を込めた呼び方で、神さまに語りかけ、祈っておられました。

当時、ユダヤ人が祈りの呼びかけにおいて、全能の神、天地の造り主、万物の支配者を「アッパ、父よ」などと親しく呼ぶことはありません。ですから、弟子たちにとって、このイエスさまの神さまとの親しい祈り、幼子のように信頼し、求め、委ねる祈りは、とても特徴的で、新しい、驚くような祈りであったのです。

イエスさまの祈りには、そのような、天の神さまとの、父と子の深い信頼と、親しい交わりが現れていたのです。

<父よ>

さて、イエスさまは、弟子たちに祈りを教えて下さいました。ここから語られるのが、今もわたしたちの教会に受け継がれている「主の祈り」です。「主の祈り」は、このルカによる福音書と、マタイによる福音書6章に出て来ます。「主の祈り」は、「祈りの学校」とも言われます。イエスさまが口移しで教えて下さった祈りは、わたしたちが祈るべきすべてのことが示されているのです。

イエスさまはこのように教えて下さいました。

「祈るときには、こう言いなさい。

『父よ、／御名が崇められますように。御国が来ますように。わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。わたしたちの罪を赦してください、／わたしたちも自分に負い目のある人を／皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』

この祈りの内容と、イエスさまが祈りについて教えて下さったことは、これから一つずつ、丁寧に聞いていきたいと思いますが、今日特に注目したいのは、イエスさまは、わたしたちにも、祈る時には、造り主である神さまを「父よ」と呼ぶように、教えて下さったということです。

本来、神さまのことを「父」と呼べるのは、まことの神さまの独り子であるイエスさまだけです。神さまとわたしたちは、創造主と被造物の関係です。そして神さまは、わたしたちが神さまをまことの神さまとして礼拝し、御言葉に従って、良い関係の内に歩いていくことを望んでおられました。しかし、わたしたちは造り主である神さまに背き、離れ、罪を犯し、神さまから遠く離れた者となってしまいました。わたしたちは、神さまを怒らせ、悲しませ、滅ぼされても仕方がないような大きな罪を犯しているのです。

しかし、イエスさまは御自分の弟子たちに、「あなたたちもまた、わたしと同じように、天におられる神を、親しく父と呼びなさい」と言って下さったのです。

どうして、罪人であるわたしたちが、神さまを怒らせ、悲しませるばかりのわたしたちが、神さまを「父よ」と呼んでよいのでしょうか。

それは、イエスさまが、神さまから離れてしまったわたしたちの罪を代わりに担い、滅ぼされるしかないわたしたちの死を引き受け、神さまとの正しい関係を回復させて下さるからです。そうして、わたしたちを神の子として、新しい命に生かして下さいます。

この「主の祈り」は、イエスさまがエルサレムへ向かわれる道中で教えられました。イエスさまは、これからエルサレムへ、十字架に架かるために向かっておられます。

すべての人の罪を赦すために。すべての人を、神さまの許に立ち帰らせ、神さまと共に生きる者とするために。すべての人を、裁かれる罪人から、神さまの子どもとするために。イエスさまがご自分の命を注いで、わたしたちの罪を贖って下さるのです。

神さまは、そのために、御自分の愛する御子であるイエスさまを遣わして下さいました。御自分の御子の命によって、造られた者であるわたしたちの命を贖い、罪から救い出して下さる。わたしたちは罪人なのに、神さまはそれほどまでに、わたしたちを愛して下さいているのです。そして、この神さまの愛を受け入れ、イエスさまの救いを信じた者を、神さまは御自分の子として、神の子として、喜んで受け入れて下さるのです。喜んで、わたしたちの「父」となって下さるのです。

イエスさまは、御自分が救いの御業を成し遂げられることによって、わたしたちが神さまに「父よ」と親しく呼びかけ、その代わりに生きる幸いを与えて下さるのです。父なる神さまとご自分との親しい交わりの中に、このわたしたちを招き入れて下さるのです。

だから、言って下さるのです。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ。』」

あなたは、罪に滅ぼされる者ではない。神さまが愛し、憐れみ、救って下さる者だ。神さまはあなたをご自分の子として下さる。そのためにわたしが来た。わたしはあなたの罪の赦しのために、十字架へ向かう。だからあなたは、この神さまの愛を受け取りなさい。罪を赦していただきなさい。新しい命をいただきなさい。まことの神の独り子である、このわたしと共にあって、あなたもまた、神の子となりなさい。

だから、あなたが祈るときには、こう言いなさい。「父よ。」

<主の祈り>

イエスさまが教えて下さった「主の祈り」は、イエスさまが、御自分の生涯すべてをかけて実現して下さい、神さまとの親しい交わりへの招きです。この祈りは、イエスさまと出会い、イエスさまの十字架と復活の恵みを与えられることによって、祈ることが可能となる、祈りです。神さまの愛を知った者が、その眼差しの中で、幼子のように、感謝と喜びをもって祈ることができる祈りです。

祈るときには、こう言いなさい。「父よ」。

この「主の祈り」の一言目の呼びかけに、神さまの愛と、憐れみと、イエスさまの大きな救いの恵みが溢れているのです。今、わたしたちにもこの祈りが与えられています。わたしたちにも、イエスさまが教えて下さったのです。

祈るときには、こう言いなさい。「父よ」。

わたしと出会ったあなたも、今、わたしにあって、こう神さまに呼びかけて祈ってよいのだ。「父よ」と。

祈りは、神さまとの交わりです。わたしたちは「父よ」と呼びかけます。

呼びかけるのは、わたしたちが一所懸命、何度も叫んで、神さまを呼ばなければ、振り向いて下さらないから、聞いて下さらないからではありません。

わたしたちをお造りになり、愛して下さい、神さまが、まず、わたしたちを受け入れて下さり、招いて下さり、見つめていて下さり、耳を傾けていて下さる。神さまの耳が、目が、愛が、いつもわたしたちに開かれている。だから、わたしたちは安心して、呼びかけて、祈ることが出来るのです。聞いて下さるから、受け止めて下さるから、祈ることが出来るのです。祈りは、わたしたちが幼子のように神さまに信頼していることの表れです。

この神さまに向かって、わたしたちは「父よ」と呼び、感謝をささげ、苦しみを訴え、助けを求めていくのです。父なる神さまは、すべてをご存知で、すべてを聞いて下さっています。そして、父なる神さまは、愛する子どもに、もっともよいタイミングで、もっともよいものを与えて下さいます。

そして、わたしたちが、父なる神さまに心に向け、呼びかけ、話しかけることを、喜んで下さいます。求めて下さいます。祈りは、神さまに信頼して生きる、神さまとの交わりに生きる、わたしたちの信仰生活の中心なのです。

「祈らないことは罪だ」と言った神学者がいます。祈ることを知っているのに、祈りをやめることは、神さまの招きに応えないことであり、神さまに頼らないことであり、感謝しないことであり、恵みを拒否することになるでしょう。いつも、片時も離れず、わたしのそばで耳を傾け、見つめ続け、愛を注いで下さっている神さまを、無視することになってしまうでしょう。祈らないことは、神さまを悲しませることであり、またわたしたちを神さまから遠ざけてしまうことなのです。

もしかしたら、信仰生活を始めたばかりの方は、「祈る」ということ自体がわからなかったり、何を祈ったらいいのかわからない、と思われるかも知れません。また、祈りの生活を長くしている者でも、こういう場面で何と祈ったら良いかわからない。あまりに辛くて、苦しくて、祈ることが出来ない、祈りたくない、ということもあります。

しかし、イエスさまは、「主の祈り」を与えて下さいました。イエスさまが教えて下さった祈りの言葉に、わたしの言葉を重ねて、心を傾けて、その恵みを一つ一つ味わいつつ祈ることで、わたしたちはまた、神さまの愛に気付かされます。そして、イエスさまの祈りのみ言葉に導かれ、祈ることが出来るようになるのです。

「主の祈り」を祈りましょう。まずは呼びかけてみましょう。「父よ」。この一言を、祈りのはじめに言うことが出来る恵みを、いつも心に留めていきましょう。

全き信頼を置くことの出来る、すべてを委ねることの出来る、全能の、造り主である神さまに祈ることの出来る恵み。この方に「父よ」と、親しく呼びかけることの出来る恵み。わたしたちは、この恵みを与えられています。今、わたしたちの口には、「主の祈り」が与えられています。イエスさまは言われます。あなたも、祈るときには、こう言いなさい。造り主を、あなたの父と呼びかけなさい。幼子のように任せ、頼り、求めて祈りなさい。

わたしたちは、イエスさまにあって、今日も神さまに「父よ」と呼びかけ、神さまとの親しい交わりの中で、歩んで行くことができるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま、アッバ、父よ

あなたに親しく呼びかけて祈ることが出来る恵みを、感謝いたします。

イエスさまが、わたしたちを罪から救い出し、新しい命を与えて下さいました。聖霊なる神さまが、わたしたちとイエスさまを一つに結び合わせ、恵みを受け取らせて下さり、あなたの子どもとして、神の子として歩む、信仰を与えて下さいました。

「父よ」。こう祈ることが出来る恵みを、わたしたちがはっきりと知ることが出来ますように。幼子のように、あなたに信頼し、すべてを御手にお委ねして、祈らせて下さい。

祈ることは、わたしたちに与えられた恵みであり、また、あなたが求めておられることです。神さまのもとに立ち帰り、神さまのみ言葉を聞き、祈りをささげ、あなたとの交わりの内に歩む日々を備え、導いて下さい。

わたしたちの救い主、イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン